大妻女子大学博物館　特別展

長尾雨山とその交友—書画文墨趣味ネットワークの人々

会期　二〇二五年一月一四日～二月二八日

解説資料

■展示図録に掲載していない翻刻文・現代語訳を掲載しています。
■展示図録は、下記QRコードより無料ダウンロードが可能です。

■執筆担当：松村茂樹（大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授、資料番号4、5、16、22、23、28、34）・木村淳（大妻女子大学非常勤講師、資料番号26、27、30、31、32、33）、青木俊郎（大妻女子大学博物館学芸員、資料番号3、24）

3　与岸田太郎尺牘

【翻刻文】

拝啓　此間御手紙被下
御老母様御病気之由
承り候故、早速御見舞
可申上と存候はゝ、彼是多用ニ
追はれ、思ひなから御無
沙汰申居候処、遂ニ御
養生不被為叶候趣
御訃音ニ接し驚愕致候、
御一統様定めて御悲歎
之御義と被存候、実ハ参上
御弔唁に申候処、此数
日無余儀取紛れ候
義有之、乍略議以書中
拝唁致候段、不悪御海
量可被下候、尚甚軽少ニ
候へ共、別紙為替券御仏
前へ御供物御調被下度候
敬具
十月廿一日　長尾甲
岸田太郎様
御一統様
《封筒　表面》
大阪北区上福島北一丁目一四七
岸田太郎様
《封筒　表面》
京都室町出水上
長尾甲

4　犬養木堂・羅振玉・長尾雨山等書画帖

【現代語訳】

梅の一枝が茅屋に背き、断橋の西に走り出る。清らかな水に臨んでますます徹し、疾い風に倚ってさらに芳しい。

雪は消えて驢馬の影は遠くなり、月は落ちて角笛の音が長くひびく。類稀なる脩竹と同調すれば、痩せも貧しさも共に忘れよう。癸丑（一九一三）菊秋（旧暦九月）、雨山が幷せて題した。

5　金渓真景図

【翻刻文】

頃向金渓会試詩、山静風急自清奇。逢人始識共絶好、肩上擔帰雪一枝。小橋流水路弯降、斜入野梅千樹間。勿道此似花只雨、四圍奚是画図山。

【現代語訳】

先ごろ金渓に赴きたまたま詩を作ったが、山は静かで風は急で自ずから清奇な趣があった。逢う人は知り合ったばかりだが共にとても仲良くなり、肩に雪のような梅の枝を担って帰った。

小橋がかかる流水の路は曲がり下り、斜めに野梅千樹の間にはいる。この花に似るのはただの雨だと言うなかれ、周囲はどうして絵に描いた山であることがあろうか。

16　行書題画詩軸

【現代語訳】

籬の菊は痩せて人影に逼り、山の風は虚しく石頭に吹く。秋色の江南はかくのごとし、いつ湖州に帰れるのであろうか。題画詩。己未小雪節（新暦十一月二十二日または二十三日）、海上の

去駐随縁室（呉昌碩の寓斎）にて。呉昌碩、年は七十六。

22 篆書周司寇壷銘軸

【現代語訳】

周司寇壷銘。司寇良父が衛姫のためにこの壷を作った。子々孫々に至るまで永く大切に用いよ。壬戌（一九二二）正月に清和居で臨摹した。竟山繇定。

23 行草書安居歌軸

【現代語訳】

安居歌。心が安らかであれば身は自ずと安らかで、身が安らかであれば室は自ずと閑かである。心と身がともに安らかであれば、何事にもかき乱されない。誰かが一身は小さいと言おうとも、安らかなること泰山のよう。誰かが一室は小さいと言おうとも、寛きこと天地の間のよう。時事堂主人の清嘱による。松陰老人。

24 万葉仮名自作歌軸

【翻刻文】

あおそらにそゝりたちける白銀の
安袁曽良珥曽〃利多遅祁流白銀濃

こしのたちやまたふとくもあるか
古志農多遅耶摩多布登久毛安留哥

昭和七年十一月二日北陸途上　直彦

26 行草書酔醒吟詩軸

【現代語訳】

酔処陶々にして醒処は真、一眠一覚酔醒の身。酔醒の世界は是非の外、水は流れ花は落ちて秋また春。酔醒吟。七十一歳南岳。

27 行書杜甫詩扇面軸

【翻刻文】

聞道長安似奕棋、百年世事不勝悲。王侯第宅皆新主、文武衣冠異昔時。直北関山金鼓振、征西車馬羽書馳。魚龍寂寞秋江冷、故国平居有所思。
江漢思帰客、乾坤一腐儒。片雲天共遠、永夜月同弧。落日心猶壮、秋風病欲蘇。古来存老馬、不必取長途。君山生。

【現代語訳】

杜甫「秋興八首之四」。聞くところでは長安の地は囲碁のように一進一退とのこと、この百年の世の出来事は悲しみに堪えない。王侯の邸宅はすべて主人が新しくなり、文武の官僚たちも以前とは異なっている。長安の北にある関所の山では軍隊のかねや太鼓が鳴り響き、征伐のために西に軍隊が進み檄文が飛び交う。魚や龍が冷たい秋の長江にこもっているように私もこの地にいるが、ふるさとの長安をいつも思っているのである。

杜甫「江漢」。江漢の地で帰郷の念にとらわれている旅人、天地の間に一人でいる役立たずの儒学者である私。ちぎれ雲が天の片隅に浮かぶように郷里から遠く離れ、永い夜の月のように孤独である。日が落ちる時でも心はなお壮んで、秋の風が吹く頃に病も回復しようとしている。古来老馬を捨てずに飼っておくのは、必ずしも長い距離を走る力のためばかりではない。君山生。

28 後園秋色図軸

【現代語訳】

噪がしい蝉の声が乱れると日は初めてたそがれ、弦管の音楽は楼中で永らく聞いていない。いかんせん愁人のわずかな鬢の毛を、故郷では秋も過ぎようとして太湖に雲がたなびいていよう。癸丑（一九一三）六月、承露閣中で写す。翠雲。

30 行草書自作詩軸

【現代語訳】

ここは門外に車馬の往来はなく、もの寂しげなもやが立ちこめ高い木がそびえる荒れた村である。私の知恵や気節は家の教えによって育まれ、医学と詩文で国恩に報いようとした。私が故郷を出る時送ってくれた友は今やもうおらず、甘苦を共にした者もどれだけ残っているだろうか。竹のかごにはまだ『孝経』が残されているので、子供らと細かく論じあうことにしよう。「帰家」。富田博士の一粲に博す。鳳岡。

31 行草書自作詩軸

【現代語訳】

春夏秋冬が過ぎて自ずと一年になり、田園の林には自ずと花が咲き実が垂れ下がっている。門は閉じていないが訪れる客もなく、まことにこれが先生の穏やかな時間である。副島種臣。

32 行書論画一則扇面

【現代語訳】

清代の院体画は特に西洋の方法を好み、真に迫る設色で明暗をはっきりさせている。焦秉貞や陳兆鳳などは東洋から西様を学び、郎世寧ら西洋の人は東洋の方法を参考にしており、結局は同じことになる。論画一則。松山君これを正せ。湖南査客。

34 缶廬遺墨集

【現代語訳】

私は先生と淞浜（上海）で名残の語らいをした。先生は送別の詩を懐にして来て、私の手を執り、「君は遠く去ってしまうが、私はすでに老いており、恐らくは再び会えはしまい」と言い、言い終わらぬうちに二筋の涙が流れた。

33　松茂山荘記草稿軸

【翻刻文】

※余白の書込は、本文中の対応箇所に①・②などの数字を付し、本文の次にまとめて記載した。また、原稿の傍点や傍線などは、書き入れに関するもののみ記した。

松茂山荘記　甲子三月

原田大観為旧忍藩士之子。（家世）（①某君）維新以降、②世変風移、士人失禄、或帰農、或服商。大観亦以父命開書坊於東京、号博文堂（④⑤）、厥業漸盛。嘗刊售予所著小説、因相識頗熟。予時年少、不治行検、日游酒市。大観往往助不給、亡何、生業中落、困頓顛踣、而絶無沮喪色。予寓大阪時、大観亦来借一厘、影印法書名画之属、鬻以為業。稍有余贏（⑥⑦）、家道復興、乃築屋於攝之池田、請予名之。往年予（一日焉）往訪其居、静坐遐矚（⑧）、脩然忘反焉。池田多業種樹者、大観所居地、（名）称花荘」、拠高阜、面攝海、淀猪名二水蜿蜒西流、望大阪城於其東南（⑨）。六甲山与箕尾山左右対峙、山皆松樹（⑩）、野多桃李、嵐影花光、映帯于几席間。距城市不遠、而有斯勝境、蓋人之所不想及也。堂前庭上有一盆松（⑪）、夭矯鬱茂、問之則曰、先人遺愛也。予瞿然改容而謂大観曰、堂上之観壮且美（⑫）矣。然未足以取名。盆松雖小、（⑬原其）其所以培養甚至者、嗚呼予知之矣。是可以名子之居矣。名曰松茂山荘可乎。夫無恒産而有恒心、惟士為能、「家風使然也」（⑭）。商估之家亦誰不仰事俯育。然其思親之情、或不如求利之急、則将不免逐利忘義、逐忘其親、況盆松之微乎。子曩失産東西遷徙、而先人遺愛宝護弗措、（非）孝思之篤、恒心之不渝、（曷能如州）庶幾商名而士行者歟。其業之所以復興者亦非偶然也。今予以子之篤于孝思、而知子

之子孫亦必思親念祖克保家風、則其守成広業如
松之茂。豈待亀卜哉。小⑮雅斯干首章曰、如竹苞矣、如
松茂矣、兄及弟矣。式相好矣、予請誦此詩以頌子之
寿⑯、併告子之子孫以勗⑰之。大観再拝⑱⑲謹奉教
命之矣。後四
五年、屢求作之記、遂書以贈。大観今年七十、有四子、
皆能成立、有父之風焉。

西村時彦未定藁

⑳〜㉗

①士字一篇文線　謙
②削世変風移四字何如　野謙
③変
④号博文堂四字不必加　謙
⑤子俊屑屋籠一出、紙価起貴。号博文堂四字不可除
⑥有作存何如　謙
⑦稍有一句刪
⑧静座以下二十四字削可乎　謙
⑨其刪
⑩叙景似画　吾
⑪堂前削
⑫撇開不費力妙　謙
⑬其所以以下十四字削何如
⑭家風五字削何如　謙
⑮小雅云々六字削之添詩字何如　謙
⑯寿改作徳似可」
⑰勗為正
⑱孟子墨者夷之章結収云、命之矣、之夷子名也。自陽明誤用命之二字、後人因襲、不知其誤、改作奉教何如。
⑲之ハ勿論夷之之名ナリ直チニ取リテ活用ス韓子曰請自隗始ノ法ヲ学フナリ　謙再閲添書
⑳以士字為線、一項一規、末幅拓開勗子孫、読者有余味。信乎仁義之人、其言藹如也　謙妄注
㉑博文堂主建在可喜。面晤之日、幸致吾意資言
㉒命意已佳、行文亦佳妙、佩服之至　鴻拝侯
㉓据盆松遺愛命名発義、匠心独造　寛拝観
㉔首尾収束、莫些滲漏、可謂完作中幅波瀾亦極妙　康拝妄
㉕公綽拝読
㉖日勝拝読
㉗豊多拝読

【現代語訳】

※原稿の修正・挿入・削除箇所を反映させて現代語訳をした。ただし、実際に修正されていない書込は反映させていない。

松茂山荘記　甲子（大正十三〔一九二四〕年）三月

原田大観（庄左衛門）の家系は旧忍藩の藩士①某君である。維新以降、世の中は変わり情勢も改まり②、士人は禄を失い、帰郷して農業を営んだ者や、商業に従事した者もいた。大観も父の命により東京に書店を開き、博文堂と号し④⑤、その事業はしばらく盛んであった。かつて私の書いた小説を刊行したことにより、面識を得て親しくなった。私は若い頃、素行も悪く、日々酒場に遊んだ。大観は時折不足を補ったが、まもなく、事業は衰退し、困窮して倒れたものの、まったく気力をなくすような様子は見せなかった。私が大阪に仮住まいしていた時、大観も来て一軒の店を借り、法書・名画の類を複製印刷し、それを売って生計としていた。やや余裕が出て⑥⑦、暮らし向きも勢いを取り戻し、家を摂津の池田に建て、私にその名前を付けるように求めてきた。私は一日そこを訪れたが⑧、大観の住む地は、花荘と呼ばれ、高い丘にあり、大阪湾に面し、淀川と猪名川の二つの川が屈曲しながら西に流れ、大阪城をその⑨東南に望み、六甲山と箕面山が左右に対峙し、⑩山は松に覆われ、野は桃李に満ち、山にたちこめたもやや花のかがやきが、座席の間に美しく映りあっている。街から離れていないのに、このように優れた風景を備えていることは、人の想像の及ぶところではない。⑪母屋の前の庭には盆栽の松が一つあり、曲がりくねって茂っている。これを尋ねると、先人が遺したものであるという。私は驚いて態度を改めて大観に言った。⑫堂上の景観は壮大で美しいが命名するには十分でない。盆の松は小さいとはいえ、⑬その手入れがはなはだ行き届いていることにちなんで、あなたの住まいを名付けたほうが良い。松茂山荘と名付けてはどうか。「一定の収入がなくても常に道を守り抜く心を持ち続けられるのは、ただ学問修養を積んだ士だけができることである」というが、⑭そうした家風である。商人の家でも父母に仕え妻子を養わない人はいない。しかしその親を思う情は、利を求める急務には及ばず、利益を求め義を忘れ、その親を忘れることはまぬかれない、ましてや盆の松のような小さなものにいたってはなおさらだろう。あなたはかつて財産を失い東西に移ったが、先人の残したものを粗末にせず、孝心が篤く、道徳心が変わらないのでなければ、どうして州（未詳）のように商人の名前で士の行いができたであろう。その事業の復興した所以も偶然ではないのである。今私はあなたの孝心に篤いためにあなたの子孫もまた親を思い祖先を思って、家風を保ち、その大事業を守ること松が茂るようであり、占いを頼みにしていたわけではないことを知っている。⑮『詩経』「小雅・斯干」の首章に、「竹がむらがり生えるように、松の葉が茂るように、兄弟が、互いに睦みあう」とある。私はこの詩を諳んじてあなたの長寿を称え⑯、あわせてあなたの子孫がこれにつとめてきたことを告げよう⑰。大観は再拝して⑱⑲、謹んで教えを奉じますと言った。それから四、五年、しばしば記を作ることを求められ、ついに書いて贈ることができた。大観は今年七十、子は四人、みな成長し、父の風格がある。西村時彦未定藁　⑳～㉗

①「士」字が一篇の文の筋になっている
謙（牧野謙次郎）
②「世変風移」の四字を削ってはどうか
野謙
③変える
④「号博文堂」の四字は加えなくとも良い
謙
⑤子俊（西村天囚の字）の『屑屋の籠』が世に出るや、評判となってよく売れた。「号博文道」の四字は削るべきではない
⑥「有」は「存」に作ってはどうか　謙
⑦「稍有」の一句削る
⑧「静座」以下の下二十四字削除すべきか
謙
⑨「其」は削る
⑩叙景は絵のようである　吾
⑪「堂前」は削る
⑫力みがなく巧みである　謙
⑬「其所以」以下の十四字を削ってはどうか
⑭「家風」以下の五字を削ってはどうか
謙
⑮「小雅云々」の六字を削り詩の字を添えてはどうか　謙
⑯「寿」は「徳」に改めるのがよいようだ
⑰「勖」が正しい
⑱『孟子』墨者夷之章をまとめていうと、「命之矣」の之は夷子の名である。陽明より「命之」の二字を誤用し、後の人は踏襲して、その誤りを知らない。「奉教」に改めてはどうか。
⑲之ハ勿論夷之之名ナリ直チニ取リテ活用ス韓子曰請自隗始ノ法ヲ学フナリ　謙
再閲添書
⑳「士」字が筋になっており、一段ごとに規律があり、最後は子孫へのはげましに展開し、読む者に余韻をもたしめる。仁義の人は、その言葉も穏やかである。
謙が妄りに注した
㉑博文堂の主人が健在で喜ばしい。お会いになられたら、どうぞよろしくお伝えください。（瀧川）資言
㉒意図は非常に優れ、文章もまたすばらしく、敬服の至りである。　鴻拝侯
㉓盆栽の松の遺品の命名によって道を明らかにしており、その趣向は独創的である　（日下）寛拝観
㉔初めから終わりまで、誤りがなく、完全な作品の中に変化があることも極めて素晴らしい　康（安井朝康・字は朴堂）
拝妄
㉕公綽拝読
㉖日勝拝読
㉗（松本）豊多拝読